

週刊 武四郎

●毎月第三週は、
松浦武四郎のお友達に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

第15号

2018年(平成30年)7月18日(水)
発行・松阪市

荷風と武四郎

明治の文明開化の時代になっ
てからの武四郎さんは、外出す
る時はいつも杖の代わりに蝙蝠
傘を持つようになりました。

ちなみに今は傘といえば色ど
りですが、昔は(といて
もつい五十年くらい前までは、
傘といえば黒一色、コウモリ
のようなので蝙蝠傘といいまし
た。

普通は真っ黒な布張りの傘で
すが、人とは一風変わったところ
のある武四郎さんは、その黒
い傘に白い布を貼り付けて、絵
師の河鍋曉斎にドクロを描かせ
ました。その他は、七十歳以上
の(すなわち自分より年上の)
人たちに揮毫を頼んで詩を書い
てもらったり……とにかく自由
自在、スペシャルな傘にしてし
まいました。何かにつけてパッ
と広げては得意満面で人々に見

せびらかしている姿が目につか
ぶようです。

武四郎さんのお出かけスタイ
ルは、ステッキ代わりのこの蝙
蝠傘に、革の小さな手提げカバ
ン……というものでした。

さて、時代は下がって戦後
の浅草……も
う一人、黒い
蝙蝠傘と手提
げカバンがト
リードマーク
の有名人がい
ました。作家
の永井荷風で
す。大作家な
のに、戦災で
自慢の自宅と
蔵書が焼けた
あとは風変わ
りな偏屈老人
になってし



▲「骸骨図縫付傘」(松浦武四郎記念館蔵)
蝙蝠傘に布を縫いつけ、70歳を超えた人々だけに
寄せ書きを頼んだ。骸骨の絵は河鍋曉斎筆。

まって、このスタイルでスト
リップ小屋に入り浸ったり、浅
草を闊歩しました。

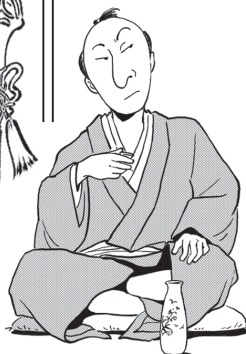
この永井荷風の母方の祖父が
……武四郎さんの生涯の友、鷺
津殺堂でした。武四郎さんが、
小雪をもともせずに出かけて
行って倒れた家というのが、こ
の荷風のおじいちゃんだった
のです。ただ、幼少期をこの
母方の実家で過ごしていた荷風

がその著作の中に武四郎のこと
をひとつも書いていないので、
もしかしたら武四郎さんが鷺津
家で倒れたというのは、語り残
したご子孫の記憶違いではない
か、という説もあります。

いずれにしても、なぜか永井
荷風の晩年のスタイルは、武四
郎さんとそっくりなのです。も
しかしたら幼少期の荷風に、こ
の風変わりな武四郎老人は知ら
ず知らずのうちに何か影響を与
えていたのかもしれない。

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけ
ての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今
の北海道)を6度にわたり探査し、アイ
ヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細
な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷
地に代わる新たな名称として「北海道」
のもととなる「北加伊道」を含む6案
を政府に提案したことから「北海道の名
付け親」と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

